

「この花、見たことある？」
夏に調査から戻ったパブレンジャーに写真を見せてもらいました。「草丈に比べて花が長いなあ」という印象の、初めて見る花を図鑑で調べるとラン科シユスラン属のベニシユスランでした。「常緑樹林内に生える多年草。葉は数個互生し長さ約3 cm、表面はビロード状で葉脈に沿って白斑がある。花は白色で淡紅色を帯び長さ約3 cm」と記載されています。植物の魅力は名前にもあると思うので由来を紹介します。私の調べた限り紅繻子蘭（べにしゅすらん）の繻子は織物の織り方の1種で、縦糸と横糸のどちらかの糸の浮きが非常に少なく、もう一方の糸だけが表に現れているように見える織り方で、布には美しい光沢があり身近なものだとネームタグやワッペンに使われています。この繻子織のような光沢のある葉に淡い紅色を帯びた花を咲かせることからこの名があるようです。光沢のある葉を繻子織に因んで名付けた方の豊かな感性に驚くばかりです。

生育場所を調査すると周辺に数株確認できました。確かに葉には光沢があり、薄い模様が繻子織のようにも見え、長い花を



名も花も美しいベニシユスラン

観察していると鳥のくちばしや馬の横顔に見えてくるかわいらしい花でした。後日、植物に詳しい方に聞くと市内では見たことがないということでした。実は、ベニシユスランは南多摩で絶滅危惧Ⅱ類（絶滅の危険が増大している種）に指定されていますが、西多摩では非分布（生態的地史的な理由から、もともと当該地域には分布しないと考えられる種）とされています。非分布であることに一番驚いたのは発見したパブレンジャーなのは言うまでもありませんが、自然の不思議を感じる植物が、まだまだ生育している可能性があるあきる野の宝の森を再発見することになりました。最後に、ベニシユスランの絶滅の脅威は「園芸目的の採取圧、林床管理の不足、シカの食害による生育環境の悪化」です。森で見ついたら、どうぞそっと観察してくださいね。（加瀬澤）